

みいちちゃんとかみさま

絵・文 佐々木 明音

①

みいちちゃん

「みいちちゃん 野菜嫌い。」

だっておいしくないんだもん。

嫌だ嫌だ。食べたくないよ。」

演出ノート

だだをこねるような口調
で

②

みいちゃん

「でも、お母さんが言った」

お母さんの声

(畑でいっぱいおひさまをあびて育ったお野菜には、すごい力があるのよ。みいちゃんのを元気にしてくれるの。お薬よりも元氣パワーがあるんだから。だから食べなきゃだめよ)
って

みいちゃん

「でもさ。お薬だったらいらなくてしょ。だって、みいちゃん元氣だもん。元氣な子にはお薬いらねえもん。」

あゝあ。食べたくないなあ。そつだ！野菜がおいしいものにならないかなあ」

おるんじ……

「お安いで用じゃ」

……どいっかから声がしました。

演出ノート

優しく諭すように

得意げに

しわがれた声で

突然ポワツと煙がたち、目の前に小さなおじいさんが現れました。胸には名札がつけられていますね。

《●よじ●のかみさま》と書かれていますよ。
そのかみさまが言っています。

かみさま

「野菜をおいしいものに変えるのなんぞ簡単じゃ。みいちゃんの好きなものはなんじゃ？
何にでも変えてあげますぞ」

みいちゃん

「みいちゃん、ケーキがいい！ケーキなら毎日でも食べられるよー」

かみさま

「お〜そうか。お安いで用じゃ」
ポンッ

演出ノート

《●よじ●のかみさま》
の部分は不思議そうに

しわがれた声で

はずんだ声で

抜きながら

④

本当に野菜がケーキに変わってしまいました。みいちゃんはびっくり。

みいちゃん

「すごい。本当にケーキになっちゃった。そっか。分かった！ りょうりのかみさまだから、嫌いなものをおいしいものに変えてくれるんだ」

みいちゃんは、大喜びですぐにケーキをパクリと食べました。

それからどういふもの…

演出ノート

ひらめいた感じで
「ひゃひひひ」「はゅっへっへ
はっきひひゅ

抜きながら

⑤

朝ごはんも、幼稚園の給食も、晩ごはんも、
かみさまが全部ケーキに変えていきます。

最初は喜んでいたみいちゃんも、だんだん
ケーキに飽きてきました。

それでも毎日かみさまはやってきて、料理
をケーキに変えていくのです。

ポンッ

ポンッ

ポンッ

演出ノート

すこし不気味な感じで

⑥

そして、ケーキだけを食べ続けたみいちゃん
は、とうとう体の調子が悪くなってしま
いました。そういえば、もう何日もうんちが
出ていません。

演出ノート

みいちゃん

「お腹が痛い。苦しいよ〜」

細々と

かみさま

「それは良かった!」

嬉しそうに、しわがれた
声で

演出ノート

かみさま

「良かった良かった。やっと効き目が出てきたようじゃのう。同じものばかり食べて元気が無くなった体では、病気の菌が大活躍できるんじゃ。」

しわがれた声で、楽しそうに

これからどんどん病気の菌を送りこめるぞ。ワクワクするの〜」

そうです。かみさまは病気のかみさまだったのです。

「病気の」は、ゆっくひはつきひ

みいちゃん

「嫌だ……。病気になんかなりたくない。助けて……」

細々と苦しそうに

みいちゃんは必死で逃げようとしてましたが、力が入りません。

でもみいちゃんは思い出したのです。

みいちゃん

「そつといえば、お母さんが野菜には元気パワーがあるって言ってたっけ……」

思い出したように

みいちゃんは、頑張って野菜を食べてみることにしました。

元気になれると思いつながら食べる野菜は、なぜか前ほど嫌でもなく、そして一口食べるごとに、本当に体の底から力がわいてくるような感じがしたのであります。

みいちゃんは自分でも気づかないうちに野菜を全部食べていました。

かみさま

「あゝあ。野菜をいっぱい食べて元気になつてしまったら、病気の菌が負けてしまつじやないか。残念だな。また他の子を探さないと……。」

ふう……。どこかに好き嫌いの多い子はいないかなあ」

あら大変。みいちゃんをあきらめた病気の神様が、また好き嫌いの多い子を探しはじめましたよ。困ったことになりましたね。もうみんなのすぐ近くに来ているかもしれせん……。」

みんなは大丈夫かな？

演出ノート

困った感じで

質問を投げかけるように